中指の魔法

片島麦子

Katashima mugiko

講談社文庫

|著者| 片島麦子　1972年広島県生まれ。第28回大阪女性文芸賞佳作、第4回パピルス新人賞特別賞などの受賞を経て、デビュー作となる本作でワルプルギス賞を受賞。

中指の魔法（なかゆびまほう）
片島麦子（かたしまむぎこ）
© Mugiko Katashima 2013

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2013年6月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277565-6

目次

1　おおばあと黒革の手袋　9
2　呼吸（いき）合わせとみどりの花畑　38
3　やじろべえの夢とカメレオン　60
4　おじいちゃんの眼鏡とアンドロイドサクラ　91

5　虫歯と葉巻の煙　127
6　上がらないファスナーと水泳選手　147
7　大グモの巣と眠り姫　169
8　消えた指輪と届いた手紙　202
解説　藤田香織　222

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

中指の魔法

片島麦子

講談社

目次

1　おおばあと黒革の手袋　9
2　呼吸（いき）合わせとみどりの花畑　38
3　やじろべえの夢とカメレオン　60
4　おじいちゃんの眼鏡とアンドロイドサクラ　91

5　虫歯と葉巻の煙　127
6　上がらないファスナーと水泳選手　147
7　大グモの巣と眠り姫　169
8　消えた指輪と届いた手紙　202
解説　藤田香織　222

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中指の魔法

1　おおばあと黒革の手袋

あの時の月もこんな風に見えていたのだろうか。

プールの底から見上げた月。ぬるい水に溶けだす月のかけらたち。ぼくの頭の上で同じリズムで揺れている。ゆらゆらと、たよりなく、物憂げに。

ぼくはそれを見ていた。

プールの底は静かで、ただひたすら静かで、それは死に近いような安らかさでぼくを包み、けれども同時にそこには絶対に手が届かないことをきっぱりとぼくに知らしめた。

絶望と希望をかわるがわる胸に抱きながら座り続けた水の底。

あの時、ぼくははじめて死というもののやるせなさを知ったのだと思う。

おおばあはいつも黒の革手袋をはめていた。年月とともに艶のなくなりかけた、ひ

じのすぐ下まである長くて頑丈な黒革の手袋だ。

ぼくが物心ついた時、それはもうおおばあの大きな両手を隙間なくぴっちり覆っていて、それがおおばあの身体の一部であることに幼いぼくは何の疑問も抱いてはいなかった。

実際、ぼくはおおばあが人前で手袋を外す姿を見たことがなかった。いつだって、たとえうだるような夏の陽射しの下にいようとも、よそ様の家に招かれようとも、だ。

それは高級フランス料理店でも同じことだった。

難解なパズルみたいに並ぶフォークやスプーンの配列を見ても、おおばあが怯(ひる)むことはなかった。むしろ怯んだのはお店の人たちのほうだった。革手袋をしたまま食事をするという無作法を除いては、おおばあのテーブルマナーは完璧だったからだ。

背筋をしゃんと伸ばし、大きく切り分けた肉や魚をそのサイズに見合った口へと音も立てずに放り込む。パンくずひとつテーブルにはこぼさない。おおばあの前にあるのはソースの跡さえ残らないぴかぴかの白いお皿だけだった。

そんなばあさんを注意する勇気のある者など誰もいなかった。彼らはおおばあの前にかしずく家来のように従順で、絶妙なタイミングで料理を持って現れては、うやう

やしく食べ終わった皿を下げていった。
おおばあが店から立ち去ると、店員たちは勝手気ままに噂した。
「いつ見てもスマートで見事な食べっぷりですね」
「小さな孫を引き連れてうちみたいな高級店に毎日のように食事をしに来るなんて、さぞや裕福な家庭なのだろう」
「あの子に両親はいないのでしょうか」
「さあどうだろうね。でも君見たまえ、あのおふたりを。大きな背中と小さな背中。何処(どこ)となく哀愁が漂っているではないか」
「あの革の手袋にだって、何か事情があるに違いない。ひどい火傷(やけど)の跡を隠すためだとか」
「そうかもしれない。いやきっとそうだろうよ。あの男の子を助け出すためにあの方はひどい火傷を負ったのだ」
「では両親は焼け死んでしまわれたのですね」
「そうだよ。なんとおいたわしいことだろう」
「まあ、それでいつもふたりきりなのね」
沈鬱(ちんうつ)な表情でうつむきがちに彼らは何度も頷(うなず)いた。そしてぼくらがレストランを訪

れるたびに、慈愛に満ちた視線を送り続けるのだった。

ぼくにとっては迷惑な話だ。

何故って彼らの想像の大半は間違っていたからだった。彼らはそれぞれが自分でつくり上げた物語にうっとりと酔っているだけだった。少なくともぼくにはぴんぴんしている母さんがいて、家が火事になったこともなければ、おおばあが火傷を負ったこともない。とにかくそれが名誉の負傷なんかじゃないことだけは確かなのだ。

そのうえぼくはレストランでする食事そのものが嫌でたまらなかった。

どんなに豪華で高級な料理だって、ぼくたちガキんちょにとってはちっとも美味しいとは思えない。その頃のぼくを魅了していたのは、おまけつきの毒々しい色をしたお菓子や歯が溶けそうなくらい甘いアイスクリームだったからだ。

おおばあとレストランで食事する時には別のおまけがついてきた。それも有難くないお小言のおまけつきだ。スープはずうずう音を立てて飲むもんじゃない、とか、お前の両手に持ってるもんは何だい？　楽器かい？　とか、窒息した熊みたいに喉を鳴らすのは感心しないね、とか、おおばあは優雅にナイフとフォークを扱いながら、ぼくを切り刻むような言葉を次々と吐いた。

「だったらおおばあはどうなのさ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com